



高橋教授の

この人に 会いたい

Vol.89

ゲスト

河崎茂子 氏

公益社団法人日本認知症グループホーム協会会長

厚生労働省によると、2025年には認知症の高齢者は700万人を超え、65歳のうち5人に1人が認知症になると言われる。認知症患者が共同生活を送るための施設で、全国に約1万4500事業所を数えるグループホームに期待される役割がますます高まっていくのは必至だ。公益社団法人日本認知症グループホーム協会の河崎茂子会長を迎え、グループホームの未来像、今後激増が予想される団塊の世代を受け入れる際の心構えなどについて、率直に意見交換した。

認知症の高齢者に常に寄り添い 本人と家族、そして職員を支える

グループホームの原点 欧州の事例を参考に

高橋 河崎先生は長年、病院運営に深く携わってきました。介護施設と病院の両方の現場に精通したお立場から、示唆に富んだ興味深いお話をお聞きできると期待しています。そもそも、認知症グループホームの運営にかかわるようになった経緯から教えていただけませんか。

精神科病院が1987年、介護老人保健施設を開設しました。老人保健施設制度が整えられて初めて、国の指定を受けた全国7モデル施設の1つでした。さらに93年、岸和田市にも介護老人保健施設を立ち上げたのですが、当時、一番困ったのは認知症の方への対応です。スタッフがきちんと対処できる方と、なかなか対処できない方に二分されたのです。

河崎 そうです。対処が難しいときは併設する病院の医師が診療し、投薬など対処療法を教えていただきましたが、もともと、精神疾患を持つていらっしゃる方が認知症を発症したとき、通常の老健では対処が難しい方がいらっしゃることを実感しました。老健ではなく、定員9人と少人数で過ごせるグループホームの良さを活かせないかと98年、グループホーム「ひまわり河崎」を開設したのが最初です。

河崎 デンマークをはじめ、ヨーロッパ各国を視察して勉強しました。フロアはひまわりのように円形で、その中心につくった大きなリビングにはいつも明るい光が差し込むようにし、ベランダ越しに、四季折々の景色が楽しめます。部屋は9人それぞれの色に染まりますから、在宅介護に困られた方のショートステイ用として10部屋用意しました。病院、老健の認知症病棟と比較して、グループホームの皆さんが一番生き活きとしてお

撮影=関口宏紀

り、笑顔があふれていました。

「家」より「個人」が上位概念に 団塊の世代のケアのあり方模索

高橋 90年代と言えば、施設利用者のは大半は明治生まれでした。米国の文化人類学者、ルース・ベネダイクトが日本文化論の名著『菊

と刀』で指摘した「恥の文化」を持ち、家を守ってきた世代です。これに対し、戦争の記憶がない団塊の世代は20歳のころ、男性は学生運動に熱中し、女性は膝上10cmのミニスカートをはいて街を闊歩していました。そのように価値観が大きく変化し、個人主義で個性を尊ぶ団塊の世代が、いよいよ今年

から後期高齢者の年齢に突入します。団塊の世代への接し方がどう変わるか、非常に興味があります。河崎 おっしゃるとおり、これからは変わってくるでしょう。「家」を背負い生きてこられた方たちは認知症になっても秩序があります。が、団塊の世代になると、コラボするということをあまりしません。

仲間と一緒に行動することが少ないようです。高橋 20代のころ、ビートルズやローリング・ストーンズを聴き始めたのが団塊の世代です。彼らの文化は、周囲や社会からなかなか理解してもらえませんでした。河崎 団塊の世代の方が認知症になったとき、何に生きがいを見出

